

平成 27 (2015) 年度

第 1 回 特待チャレンジ入試 2 月 1 日 筆記試験問題

## 【国語】

＜注意＞

- ◆ 解答時間は 45 分である。
- ◆ 開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけない。
- ◆ 問題は表紙をのぞいて 7 ページある。落丁・乱丁があった場合は速やかに手をあげて監督者に知らせること。
- ◆ 解答は全て解答用紙に記入すること。
- ◆ この冊子の余白はメモなどに自由に使用してよい。

桜丘中学校

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

## 後方重点

最後にもうひとつ、西洋と日本の論理構造の大きな違いを取り上げてみましょう。それは、日本人は大事なことを最後に伝えるのに対して、西洋人は最初にいおうとする点です。ここはまったく正反対なので、しばしば誤解の原因になります。

たとえば日本語の話せるアメリカ人の青年が、日本人の女性をドライブに誘ったとしましょう。日本の女性は、ほとんどの場合、いきなり「ノー」とはいいません。「ドライブにつき合ってくださいませんか？」と誘われれば、まずは「それは素敵ですね」などとこたえます。それを聞いたアメリカ青年が日時や行き先など具体的な話を始めると、風向きが変わってくるのです。いついつはどうかと聞かれると、「でもその日は都合が悪くて……」と否定的なことをいい始めます。そして最終的には「ノー」になるのです。

このなりゆきを、「アメリカ人は理解できません。最初に「素敵ですね」とドライブを肯定したのであれば、最後まで「イエス」でなければ話がおかしい。それを日本人は、はじめは枕のようなものだと思っています。最後まで聞いてくれないと困る、のです。結論に持っていくまでに、相手を傷つけないようにという配慮も含めて、いろいろなことをいうわけです。「イエス」が「ノー」に変わるだけではありません。はじめは「それはちよつと難しいですね」と難色を示しておきながら、最後は「仕方ない、それで行きましょう」という結論に落ち着くこともしばしばです。とにかく、一本調子ではありません。話は飛ぶのです。「イエス」か「ノー」かは最後まで聞かなければわかりません。

日本人にとってもっとも望ましい形は、A ことでしょう。前に、寄付を断るのに「考えておきましょう」とこたえる関西人の話をしましたが、あれもその一例。そこにあるのは、「いわぬが花」という美意識です。

英語の場合、たとえば誰かに借金を申し込もうと思ったら、まず最初に「自分に貸せるお金を持っているか？」と質問するでしょう。日本人は、いきなり本題に入ったりしません。本題に入るどころか、最後まで「いつ見てもすばらしいお庭ですね」だの「お子さんもすっかり立派になられて」だのと相手を持ち上げるような世間話を肝心なことはなにもいわずに、その日は帰ってしまったりします。もののわかった人がそうするのです。

すると相手は「なにもいわずに帰ったが、何か頼み事があったに違いない」と判断して、あらためて「何か話があったのでは？」と電話をかけたりますのです。それをしないで放っておけば、<sup>2</sup>察しの悪いわからず屋と思われてしまうからです。

## 冒頭重点

大事なことを最後に持つていく論理構造の典型は、落語でしょう。落語家が最初に話し始める「枕」は、本題とはまったく関係のない世間話のようなものです。単にお客の気持ちを惹きつけようとしているだけです。そこを聞いていなくても、あとがわからなくなることはありません。それに対して最後の「注、サゲ」は絶対に欠かせない落語の命のようなものです。そこを聞かなければ、話は体になさくなります。

日本人はそういう構成が普通だと思つていますから、本を読むときもまえがきや序章などのイン  
TRODクションはあまり熱心に読みません。落語の枕のようなものと思つて読み飛ばす人も多いで  
しょう。

でも、翻訳書でそれをやると痛い目に遭うことになります。英語では大事なことを最初に書きます。  
イントロダクションをしっかり読んで理解しておかないと、それ、イコウがよくわからないということ  
になりかねません。なかには、イントロダクションだけ読めば大まかな論旨はわかるので、あとは読  
まなくてもよい本もあるくらいです。そういうイントロダクションを書く日本人の物書きはすくない  
でしょう。

日本語でもひとつだけ、先に大事なことを書くメディアがあります。新聞です。新聞は紙面づくり  
のスタイルを西洋からそのまま取り入れたので、最初の見出しでいちばん大事なことを書くようにな  
りました。次に大事なものはリード部分で、そこまで読めばニュースの大筋はわかります。記事を最後  
まで読んでも、見出しやリードにないような重要なことは書いてありません。語りのほうは<sup>4</sup>カットし  
てもいいようなことが書かれているのです。

しかし日本人の読者はどうしても文章に落語的な展開を求めてしまう傾向がありますので、新聞の  
蛇足のような末尾では物足りません。書いている記者にしても先に大事なことを書くという構成が、イ  
タについていないので、記事の終わりが淋しくなりがちです。新聞記事に何とも尻切れトンボな印象  
を受けることがあります。<sup>5</sup>新聞の記事はつまらないと感じる人がいるのは、そのためでしょう。

同じジャーナリズムでも、<sup>6</sup>週刊誌は違います。記事の冒頭部分は、落語ではないが、枕と同じよう  
なイントロを置きます。ぐつと当たりがやわらかくなります。噂話のようなものから始めて、読者の  
<sup>d</sup>コウキシンを刺激します。そこから徐々にストーリーを展開して、重大な具体的事実は後ろのほうに  
なるのが、週刊誌の基本的なスタイルです。

(外山滋比古『考えるとはどういうことか』より)

注1 サゲ：話の結論。落ち。

問一 二重傍線部 a「世間」の読み方をひらがなで記し、b「イコウ」、c「イタ」、d「コウキシン」  
をそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 傍線部1「アメリカ人は理解できません」とあるが、その原因として考えられるアメリカ人の習  
慣は何か。最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

- ア 受けた誘いは断らないようにする習慣。  
イ できるだけ具体的に話そうとする習慣。  
ウ 大事なことを最初に伝えようとする習慣。  
エ 相手の話を最後まで聞こうとしない習慣。  
オ 誤解のないように意思を伝えようとする習慣。

問三 本文中の空欄 A にあてはまる語句として最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

- ア 分かりやすく伝える
- イ 自分も意見をもたない
- ウ 最後まで結論をいわない
- エ 相手の意見も尊重する
- オ 相手に口をはさませない

問四 傍線部2「察しの悪いわからず屋」と反対の意味で使われている語句をここよりひとつ前の段落から八字で抜き出して答えなさい。

問五 傍線部3「イントロダクションはあまり熱心に読みません」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

- ア 日本人は本題よりも世間話のほうを重要視するから。
- イ 日本人は本の内容を理解することにこだわらないから。
- ウ 日本人は読み手を惹きつけるための工夫に興味がないから。
- エ 日本人は文章の要点を最後に書かれるものだと思えるから。
- オ 日本人はイントロダクションを読むことに慣れていないから。

問六 傍線部4「カットしてもいいようなこと」と同じ意味で使われている二字熟語をここより後の本文中から抜き出して答えなさい。

- 問七 傍線部5「新聞の記事はつまらないと感じる人がある」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。
- ア 記事の伝えたいことが分かりにくいから。
  - イ 記事の後半部分が盛り上に欠けるから。
  - ウ 最後まで読む価値のない記事ばかりだから。
  - エ 記事の前半部分だけ読むことを強いられるから。
  - オ 落語のようなユーモアが盛り込まれていないから。

問八 傍線部6「週刊誌は違います」とはどういうことか。それを説明した次の一文の空欄にあてはまる語句として適切なものを、次の中からそれぞれ記号で答えなさい。

- 週刊誌は I と違い、大事なことを II で述べるスタイルを持っているということ。
- ア 落語
  - イ 新聞
  - ウ ジャーナリズム
  - エ 前半
  - オ 中盤
  - カ 後半

問九 次にあげたもので本文の内容に合うものには○を、そうでないものには×を記しなさい。ただし、すべて同じ記号にした場合は採点の対象としない。

ア 日本人は「後方重点」の論理を持っている。

- イ 新聞は日本人らしい論理展開を持ったメディアである。
- ウ 西洋人は誘いを受けたときに相手を傷つけないための配慮をしない。
- エ 英語を日本語に訳した翻訳書はイントロダクションだけ読めば内容を全て理解できる。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校三年生の頃の「僕」は、近所の子供たちを引き連れて遊ぶがき大将のような存在だった。そのグループの中には片足が義足の「あーちゃん」がいたが、親たちは自分の子供が彼と遊ぶことをあまり好ましく思っていない。

あるとき、僕たちは住宅の裏にある小さな山の斜面の木の上に基地を作ることにした。僕たちは僕を先頭に一列になって山を登っていた。斜面には草が生えていて、何度も足を取られた。転ぶ子もいるほど斜面は急だったのである。途中まで登ったとき、僕の二歳年下の弟が僕の背中を叩いた。

「兄貴、あーちゃんが……」

見ると、あーちゃんは斜面の下の道端に立ってじっと僕らの方を見上げていたのだ。彼にはちよつと登るのは難しかったのである。弟が小声で、どうする？ と聞いてきた。小さな子供たちも僕の方を見ていた。僕は「小さくため息をついた」。

「ちよつと行ってくる」

僕は弟にちびつこたちを任せて、あーちゃんのところまで滑り降りていった。

あーちゃんは僕の顔をじっと見ていた。僕はあーちゃんの足のことも考えずに山を登ってしまったことでちよつと心が恥ずかしかった。

「すまんかった」

僕が素直にそういつて手を差し出すと、彼は「目をぱちくりさせたのだ」。

「なんで謝るとや。それになんなその手は」

僕はそれ以上は何もいえなかった。

「今日はこれから親戚の人ちへいかならんけん、皆とは遊べんと。そのことばいおうとおもつとった」

あーちゃんはそういうと、A 背中を見せて帰って行った。僕は差し出していた手を引込めて、身体を斜めにしながら一本道を歩く彼の後ろ姿を見つめていたのだ。

それからというものの色々なことが頭の中に渦巻いて、あーちゃんと遊ぶときは僕はすごく神経を使うようになっていった。かんけりはしないことにしたし、駆けっこも止めた。人気のあつた草スキーも暫く中止にしたし、木の上に作ろうとしていた基地は広場の焼却炉の裏に変えた。彼の身体のことを考えれば当然のことだったが、まだ子供だった僕には何だか気が重い判断ばかりでもあつた。あーちゃんさえいなければ、もっといろんな遊びが出来るのにと考えては自分の「そんな醜い思いに辛くなるのだった。そして広場に彼の姿を見かける度に憂鬱になり、また気が重くなるのだった」。

そんなあるとき、僕はあーちゃんが投げた石が目に入り危うく失明しそうになったことがあつた。

そのとき広場は日が暮れだして暗くなりかけていたのだ。僕たちは敵味方に分かれて石投げ遊びをしていたのである。あーちゃんは僕を狙ったわけではなかった。僕の前にいた弟を目掛けて投げたのだ。石投げのルールは **B** 顔を狙わないというものだったが、彼の場合義足のせいでバランスがとれなかったのである。僕の前にいた弟はあーちゃんの投げる石を、難なくよけたのだが、僕はその暗さのせいも重なって避けることができなかったのだ。弟が身体をひねった瞬間、僕の目には一瞬あーちゃんの姿が見えた。そして、次には僕の目に石がささったのである。石を投げた張本人は僕に謝りもせず、痛さで転げ回る僕をただじつと見下ろしているだけだった。

その後が大変だった。僕はすぐに皆を解散させ、弟とうちへ戻ったのだ。目はずきずきと痛かったが、そのことは **4** 親には内緒にしておけよと弟に釘を刺した。石投げという危ない遊びをしていたことを両親に咎められたくなかったこともあったが、もしもそれがあーちゃんが投げた石のせいだと知ったとき僕の両親や他の子供たちの母親が取るだろう態度が気になったからでもあった。しかし、痛みは引くどころか **C** ひどくなり、子供部屋で唸っている僕を心配した弟が親にばらしてしまっただ。僕は直ぐに病院へ運ばれ治療を受けた。白目のところがペロりと剥がれていたのである。医者はあとちよつとずれていて角膜に触っていたら間違いなく失明だったよと説明するのだった。

そしてそれから暫くのあいだ僕は眼帯をつけてすこすこになった。しかし、あーちゃんときたら僕の眼帯姿には一言も触れず、またいつものように遊びに参加してきたのである。まるで自分がやったのではないといわんばかりの態度であった。弟が、何かいおうとしてあーちゃんに詰め寄ったが、何故だかわからないが気がつく僕はそれを制していたのである。片方の目を塞がれたことで、僕には違う何かが見え始めていたのだ。そして僕たちは何もなかったようにまた日暮れまで遊ぶのだった。

やはりあーちゃんといっしょに遊ぶことは気が重かったのだが、月日が流れるうちに、それは苦痛ではなくなっていた。彼の義足の金具の音も気にならなくなっていたのである。あーちゃんが僕らの仲間になってどれくらいの時間がたった頃だろう。僕たちは近くの田んぼに蛙を捕りにいったのだ。田んぼは通過した台風のせいであかるんでいた。ちよつとした窪みがあつて、あーちゃんはそこに足をとられたのである。泥の深みにはまって抜け出せず **D** しているあーちゃんに、僕は本当に自然に手を差し出していたのだ。彼がハンディを背負っている人だという意識など微塵もなかった。僕の手は彼の前にごく自然に差し出されていたのである。

すると不思議なことに「あーちゃんの手が僕の手を握ってきたのだ。僕は力任せに彼の身体をひきずり上げるのだった。」

「ありがとう」

あーちゃんがそうだったので、僕はただ照れるしかなかったが、あーちゃんのそんな言葉を聞くのははじめてのことでも嬉しかったのである。

(辻仁成『そこに僕はいた』より)

問一 二重傍線部 a「難なく」、b「制して」の意味として適切なものをそれぞれ次の中から記号で答

えなさい。

a ア 身軽に                      イ すんなり                      ウ すばやく                      エ 苦労して                      オ バランスよく

b ア おさえて                      イ 応援して                      ウ しかって                      エ 真似して                      オ 指導して

問二 本文中の空欄 **A**、**B**、**C** にそれぞれあてはまる語として最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。(同じ記号を二度以上使ってはけません)

ア 絶対                      イ くるりと                      ウ ますます

問三 本文中の空欄 **D** にあてはまる四字熟語として最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア 一喜一憂                      イ 意気投合                      ウ 一念発起                      エ 自画自賛                      オ 悪戦苦闘

問四 傍線部1「小さくため息をついた」とあるが、そのときの「僕」の気持ちを説明した文として最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア 弟たちの体力のなさを考えに入れずに山登りを計画した自分を責める気持ち。

イ 大した高さでもない山を登ることすらできないあーちゃんを馬鹿にする気持ち。

ウ 山登りを続けるのを途中であきらめようとしている弟たちを情けなく思う気持ち。

エ あーちゃんの足に気を配ることなく山を登ってきた自分を恥じる気持ち。

オ 自分が山に登れないということを弟たちに言わせるあーちゃんにいらだつ気持ち。

問五 傍線部2「目をぱちくりさせた」とあるが、そのときの「あーちゃん」の気持ちを説明した文として最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア 人を傷つけたことを謝れば許してもらえると考えている「僕」の浅はかさをなじる気持ち。

イ 足の悪い自分を助けることで自身の評価を高めようとする「僕」の策略を軽蔑する気持ち。

ウ 親戚の家に行くという自分の事情を無視して山を登った「僕」の無神経さをとがめる気持ち。

エ 足が不自由な自分に手を貸そうとする「僕」の同情を素直に受け入れることができない気持ち。

オ 山に登れなかった自分を見捨てずにいる「僕」のさりげない優しさを不気味に感じる気持ち。

問六 傍線部3「そんな醜い思いに辛くなる」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア あーちゃんを足手まといと感じてしまう自分が嫌になるということ。

イ 気まづくなったあーちゃんと遊ぶのを重荷に感じているということ。

ウ あーちゃんのせいで遊びが制限されるのは弟たちに申し訳ないということ。

エ あーちゃんのために予定を変更していることを本人には言いづらいということ。

オ あーちゃんをケガさせてはいけないという責任の重さを感じているということ。

問七 傍線部4「親には内緒にしておけよと弟に釘を刺した」のはなぜか。その理由を述べた一文を本文中から抜き出し、その最初と最後の五字を記しなさい。(句読点や記号は字数に入れるものとする)

問八 傍線部5「何かいおうとして」とあるが、「弟」のいおうとしたセリフとして最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア 足の具合はどう？

イ 早く遊びにいこうよ。

ウ お兄ちゃんに謝れよ。

エ お兄ちゃん失明したんだぞ。

オ この眼帯がっこいいでしょ。

問九 傍線部6「それ」は何を指しているか。本文中から十五字で抜き出して答えなさい。(句読点や記号は字数に入れるものとする)

問十 傍線部7「あーちゃんの手が僕の手を握ってきた」とあるが、その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる語句を、それぞれ本文中から指定の字数で抜き出して答えなさい。

あーちゃんが I (十一字) ことは関係なく、困っている友人を助けようとした「僕」

の II (二字) な優しさがあーちゃんに伝わったから。

《以下 余 白》

氏 名

総合得点

**POLYMER**

**PLASTIC**

[illegible]

合計

| 問九 | 問八 | 問七 | 問六 | 問五 | 問四 | 問三 | 問二 | 問一 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ア  | I  |    |    |    |    |    |    | a  |
|    |    |    |    |    |    |    |    |    |
| イ  | II |    |    |    |    |    |    | b  |
|    |    |    |    |    |    |    |    | c  |
| ウ  |    |    |    |    |    |    |    | d  |
|    |    |    |    |    |    |    |    |    |
| エ  |    |    |    |    |    |    |    |    |
|    |    |    |    |    |    |    |    |    |
| 合計 |    |    |    |    |    |    |    |    |

合計

**Keywords:**